様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年６月１４日現在

研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2005～2008
課題番号：１７５２０２０６
研究課題名（和文）　ドイツにおける古典生成とゲーテー規範化のメカニズムと危機の時代における古典の機能
研究課題名（英文）The Formation of Classical Philology in Germany and Goethe - The Mechanism of Canonization and the Function of Classics in Phases of Crisis

研究代表者
井戸田　総一郎(ITODA　SOICHIRO)
明治大学・文学部・教授
研究者番号：４００９５５７６

研究成果の概要：平成１４年度～平成１７年度の基盤研究(C)(2)「１９世紀ドイツにおける古典生成とゲーテー規範化のメカニズムと記憶・伝播のメディア」を踏まえ、その成果にさらに次の４つのテーマ群、１.古典ゲーテの制度化とニーチェにおける反制度化のディスクルス、２.創造と知の乖離の克服をめぐるディスクルス、３.ドイツ的内面性の崩壊と古典、４.ヨーロッパ文学の全体性回復をめぐるディスクルス、のテーマを各章とする著書を刊行する段階にまで研究を深化した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００５年度	1,000,000	0	1,000,000
２００６年度	800,000	0	800,000
２００７年度	700,000	210,000	910,000
２００８年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総　計	3,200,000	420,000	3,620,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学
キーワード：古典、ゲーテ受容、文学史

１．研究開始当初の背景
（１）本研究は、平成１４年度～平成１７年度の基盤研究(C)(2)「１９世紀ドイツにおける古典生成とゲーテー規範化のメカニズムと記憶・伝播のメディア」（課題番号：１４５１０５９４）の継続研究として遂行されたものである。
（２）上記研究においては、ゲーテをドイツの古典作家とするメカニズムを１８世紀終わりのロマン派から１８７１年ドイツ第二帝政成立の時期までを中心に分析したが、本研究では、それ以後の時期をゲーテ没１００周年記念行事が行われた１９３２年、さらに戦後のクルティウスの批評活動までに設定し、危機の時代におけるゲーテ崇拝の複雑な様相を対象にした。

２．研究の目的
（１）１８７１年以後のドイツ第二帝政下における「ゲーテ文献学」（ヴィルヘルム・シェーラ）の成立過程と Germanistik の学科としての制度化過程を分析し、ゲーテ崇拝とド

イツ国民意識確立の関係を明らかにする。
（２）ニーチェにおける文献学批判の諸相を分析する。古代との創造的関わりの模範としてゲーテを礼賛することによって、ゲーテを知識・学識のディスクルスから救出しようとするニーチェの試みに光を当てる。
（３）発生学的・文献学的手法によるゲーテの作品研究を対して、ゲーテの創作の核心に迫ろうとするゲオルク・ジンメル等のゲーテ記述を批判的に検討する。
（４）１９３２年ゲーテ没後１００周年記念祭におけるトーマス・マンのゲーテ講演を中心に、ナチ政権誕生前夜の危機的状況下でのゲーテ受容の局面を豊富な資料に基づいて分析する。
（５）戦後ドイツにおいて、ナショナリズムを越えたヨーロッパ文学の地平でゲーテを再評価する試みが始まる。特に、ローベルト・クルティウスの『ラテン中世とヨーロッパ文学』はその代表的な事例であり、このテーマに関連したアライダ・アスマンの優れた業績をもとに、資料収集と分析を遂行する。

３．研究の方法
（１）アンナ・アマーリア記念図書館及びゲーテ・シラー古文書館に所蔵されている膨大なゲーテ関連の資料のうち、本研究と関係の深いオリジナル資料を、同図書館・古文書館の専門員の協力を得て可能な限り収集し、その都度のゲーテ受容をアクチュアルな環境のなかで再現するように努めた。
（２）ヴァイマール市古文書館等の研究機関において、例えば１９３２年のトーマス・マンによるゲーテ講演の前後の反響を再現するために、同時代の新聞資料・パンフレット等の資料を収集し分析した。
（３）「ユーゲント」や「ジンプリチスムス」等の重要雑誌に掲載されたゲーテ受容関連の文字・図版資料を活用し、ゲーテ受容のその都度の同時代的アクチュアリティーの再現に努めた。

４．研究成果
平成１４年度～平成１７年度基盤研究(C)(2)「１９世紀ドイツにおける古典生成とゲーテ－規範化のメカニズムと記憶・伝播のメディア」（課題番号：１４５１０５９４）の研究成果と今回の研究成果を合わせて、次のような構成の出版プロジェクトに到達した－

第１章
ギリシャ人として表象されるゲーテ－シュレーゲルとハイネにおけるゲーテ崇拝のディスクルス
1.1 胸像となるギリシャ
1.1.1 理想の身体＝古代ギリシャの彫像
1.1.2 不在の身体の代理機能（記念碑、メダリエ）
1.2 古代ギリシャ風に生きる－フリードリヒ・シュレーゲル
1.3 規範性と歴史性－ゲーテとギリシャ
1.4 嫉妬と批判－ゲーテ崇拝とハイネ
1.4.1 「原・著者」ゲーテにたいする「嫉妬」－ロマン派的心性の共有
1.4.2 ゲーテの作品の「不妊性」－芸術による共生の不可能性
1.4.3 ゲーテ＝ヴォルフガング･アポロ－「穢れな裸体」か「恥部隠し」か
第２章
古典にされたゲーテ－規範化のメカニズムと記憶・伝播のメディア
2.1 規範化のメカニズム
2.1.1 選別と排除
2.1.2 普遍化と超越化
2.1.3 親密性の構築－「遅れてきた国民」と古典
2.2 記憶と伝播のメディア
2.2.1 引用される古典的名句－ゲオルク・ビューヒマンの構想
2.2.2 自動販売機で売られる古典－廉価版になった古典
2.2.3 「簡要文学史」と古典
第３章
古典ゲーテの制度化とニーチェにおける反制度化のディスクルス
3.1 政治と文化の象徴的一体化－ベルリンとヴァイマール
3.2 ヘルマン・グリムとヴィルヘルム・シェーラ－ベルリン大学と「ゲーテ文献学」
3.3 文献学の内発的批判者としてのニーチェ－バーゼル大学時代の遺稿集のなかのゲーテ
3.4 文学の「反革命者」としてのニーチェ－『反時代的考察』のなかのゲーテ
第４章
創造と知の乖離の克服をめぐるディスクルス
4.1 ゲオルゲ派とディルタイ
4.2 ジンメル－原現象ゲーテへの旅
4.3 ベンヤミン－創作環境の復元と病者の文献学
第５章
ドイツ的内面性の崩壊と古典
5.1 ナチの台頭とゲーテ没後 100 周年記念
5.2 トーマス・マンとトゥホルスキー

5.3 ナチとゲーテ受容
第 6 章
ヨーロッパ文学の全体性回復をめぐるディスクルス
6.1 ヘッカー－教養の再ヨーロッパ化
6.2 エリオット－ヨーロッパとしての文化記憶
6.3 クルティウス－ラテン語ヨーロッパへの回帰

上記の第 1 章と第 2 章は科学研究費の研究成果報告書『１９世紀ドイツにおける古典生成とゲーテ－規範化のメカニズムと記憶・伝播のメディア』としてすでに完成している。本研究の成果は、第 3 章から第 6 章に関わる部分であり、最終的な出版に際しては、第 1 章と第 2 章にも加筆を行なう予定である。

第 3 章の「古典ゲーテの制度化とニーチェにおける反制度化のディスクルス」に関して、マンデルコーの“Goethe imUrteil seiner Kritiker“における成果を基本に置きながら、アンナ・アマーリア記念図書館等の機関において、「ゲーテ文献学」の成立と大学における制度化のプロセスを実証的に跡付ける作業を行なった。特に 1972 年に執筆されたレネ・シュトラッサーの“Herman Grimm. Zum Problem des Klassizismus“は、ヘルマン・グリムがゲーテへの「親密な近さ」をどのような感覚で捉えいたのかを論じたものであり、本研究の文脈で重要なものである。ベルリン大学におけるグリムの一連のゲーテ講義についてもオリジナル資料を含めて収集した。シェーラについては、ベルリン大学図書館に講義録等が保存されており、「ゲーテ文献学」を制度化する上でシェーラの政治力が大きな役割を果たした点を示す資料を紹介する。また、当時の Germanistik の重要性はギムナジウムにおけるドイツ語・ドイツ文学の授業担当者を輩出する機能と密接に関係しており、「ゲーテ文献学」の制度化の影響を見る上で、当時のギムナジウムの記録資料は興味深い。例えば、1888 年の“Deutsche Rundschau“に掲載された“Die Deutsche Schulfrage und unsere Ckassiker“は、当時のギムナジウムのカリキュラムの分析に踏み込んでおり、本研究において新たに光を当てる資料になる。

このような文脈のなかでニーチェの特にバーゼル大学時代の遺稿集におけるゲーテ記述を見ていくことが、本研究の新機軸である。ニーチェは大学とギムナジウムにおいてギリシャ語等の西洋古典学を教授しており、その際に学生にたいして古典とどのように関わるべきかの独自の考えを伝えた記録が、当時の遺稿集に収められている。ゲーテが『古代とモデルネ』のなかで述べた「本格的にギリシャ風に生きよ」という要請に類似した言葉が、ニーチェの遺稿集にも散見する。この時期のニーチェは、「模範」「模倣」「カノン」「競争」「形式」「スタイル」「創造」「知識」などの概念を駆使して、古典と現代の生との新しい関係の構築を目指し、教育システムのなかで制度化される古典にたいする批判を強めていく。

ニーチェのゲーテ像は世紀転換期に大きな影響を及ぼした。その伝達で重要な役割を演じたのはゲオルゲであり、ゲオルゲにおけるゲーテ受容についてはマンフレート・ドゥルツァーク著“Stefan George und Goethe.Poetische Vereinnahmung oder Produktive Aneignung und Verwannlung?“の優れた先行研究があり、それを基にグンドルフやジンメル等のゲーテ記述についても分析を進めた。それらは、歴史学的・発生史的記述にたいしてゲーテの創作の内奥に迫ろうとするものであり、その成果について、本研究では批判的な検討を行なう。ディルタイの「生の哲学」の基礎に、このようなゲーテ受容の新しい展開が関係している点や、ベルリン大学における学派の勢力図の変化のなかでディルタイのゲーテ解釈を読み込む作業も行なった。また、この章ではベンヤミンの文献学批判と新しい文献学の可能性に関する言説を、ゲーテ記述との関係で見ていく。

第 5 章では、これまでほとんどまとまったテーマとして扱われることがなかった 1932 年のゲーテ没後 100 周年記念に光を当て、ナチ政権誕生前夜の緊張した政治状況のなかでゲーテがどのように受容されたのかを見ていく。トーマス・マンのゲーテ講演が特に有名であり、これについてはヴォルフガング・フリューヴァルトの論文“Das Goethejahr 1932: Thomas Mann liest Goethe.“に詳しく分析されている。本研究では、ゲーテ記念祭に関してアンナ・アマーリア記念図書館、ゲーテ・シラー古文書館及びヴァイマール市古文書館に所蔵されている新聞・パンフレット類や講演原稿などの資料を収集し、当時の多様な言説の再現に努める。特に、絵入り雑誌「ユーゲント」と「ジンプリチスムス」に掲載されているゲーテ関係の図版・文字資料は、当時のアクチュアルな状況を再現する上で重要であり、その一部はイエナ大学等での講演において紹介した。

第 6 章では、戦後の状況のなかでゲーテを

ドイツ・ナショナリズムから解放してヨーロッパ文学の文脈のなかで再読しようとする機運が生まれてくる経過などについて、ベルリンを中心にドイツ主要大学の講義録などにも目を配って分析する。特にローベルト・クルティウスの批評活動がこの文脈では重要な意味を持ってくる。この問題は戦後における教養の再構築の問題とも密接に関わっており、テオドール・ヘッカーやT.S.エリオットにおけるゲーテ受容もこのような文脈のなかで紹介する。

本研究の成果として上記のような出版を目指し、最後にヨーロッパにおける古典の機能が２１世紀においてどのようなものになっていくのかをテーマに、ヤン・アスマン及びアライダ・アスマンへのインタビューを掲載する。筆者は「文字と記憶」に関するテーマで両教授から国際会議に招待されたことがあり、また筆者が日本独文学会蓼科文化ゼミナールの実行委員長として両教授を講師として招待したこともあり、緊密な関係を持っている。両教授の協力を得て、本研究の成果を２１世紀における将来の古典の在り方の問題にもつなげていく。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① Soichiro Itoda (mit Hans-Joachim Knaup): Japanischer Schriftdiskurs zwischen Oralität und Literalisierung. In: (Hrsg.) E. Birk, J.G. Schneider: Philosophie der Schrift. Max Niemeyer Verlag, Tübingen 2009, S.221-243

②井戸田総一郎：ゲーテのメロドラマ『プロゼルピーナ』－言葉、音楽、活人画、明治大学文学部紀要「文芸研究」、第１００号記念号、２００６年、８３頁～１０４頁

〔学会発表〕（計２件）

① Soichiro Itoda: Goethes Melodram "Proserpina" Wort - Musik – Tableau. Freundeskreis Goethenationalmuseum Weimar e. V. の招待講演。(Goethenationalmuseum Weimar , 2007)

②Soichiro Itoda: Wort, Bild und Design. Mediale Erinnerungsvektoren – Visuelle Darstellungmuster in „Jugen“ und „Sipplicissimus“. Friedrich-Schiller-Universität Jena, Philosophische Fakultät, Medienwissenschaftにおける招待講演。(Friedrich-Schiller-Universität Jena , 2006)

〔図書〕（計１件）

①Soichiro Itoda: Berlin & Tokyo – Theater und Hauptstadt. Iudicium Verlag, München 2008. 305 Seiten.

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
井戸田　総一郎（ITODA　SOICHIRO）
明治大学・文学部・教授
研究者番号：４００９５５７６

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし